

近代の国づくり（1867～1900） その8

《石炭商、浅野総一郎は、セメントとコレラ消毒薬で成功》

横浜で石炭を商っていた浅野総一郎（生没年：1848－1930年）は、売り込み先の横浜ガス製造工場において困っていた廃棄物のコークスを安値で買いうけ、官営深川セメント工場に燃料として売ること成功します。そしてガス製造工場に常磐産の石炭（注1）を売り込みにも成功します。

また石炭からのガス製造には、コークスのほかにコールタールが出てきます。コールタールからは、消毒液の石炭酸（フェノール、注2）が抽出できるのですが、東京衛生試験所（注3）が、革新的な抽出手法の開発に成功。折から1881年（明治14）に、関東でコレラが流行し（注4）、浅野は、消毒薬を大量に欲していた試験場にコールタールを売ること成功します。

総一郎の成功は、ガス生成の廃棄物のリサイクルを産業化したことによってもたらされたわけです。企業家としての鋭い眼力を持つとともに、バイタリティ溢れる人物でした。

一方、政府は、薩英戦争などの出費が嵩んだことから、「国会開設の詔」が出された1881年（明治14）、松方正義を大蔵卿に登用し、緊縮財政政策を断行します。（注1）加えて、官営工場が次々に払い下げられていきました。

総一郎は、石炭とコークス、コールタールで儲けた資金を元に、1884年（明治17）、赤字で操業休止に追い込まれていた深川セメント工場の払い下げを受け、深川セメント製造所（現太平洋セメント）を設立。この仲介をしたのが、総一郎の才覚を見抜いた渋沢栄一（生没年：1840－1931年）でした。

1886年（明治19）、消毒薬もなんのその、コレラが関東で大流行し、多くの死者が出ました。コレラは、経口感染症であり、安全な飲料水を供給する近代水道を開設する動きに拍車がかかります。

注1：常磐炭鉱は、石炭産業の構造不況時に観光で生き残ることを考え、常磐ハワイアンセンター（現スパリゾートハワイアンズ）を創業し成功しています。

注2：フェノールに消毒作用があることを発見したのは、イギリスのジョセフ・リスター（生没年：1827－1912 年）。1865年、フェノールを沁み込ませた包帯で治療し炎症を防いだことを翌年論文で発表。消毒作用があるということで、コレラ流行の際、散布されるようになりました。

注3：東京衛生試験所は、内務省衛生局管轄の試験所。1874年（明治7）東京試薬場としてスタートし、1887年（明治20）東京衛生試験所と改称。第5代所長に後藤新平（生没年：1857－1929 年）がいます。

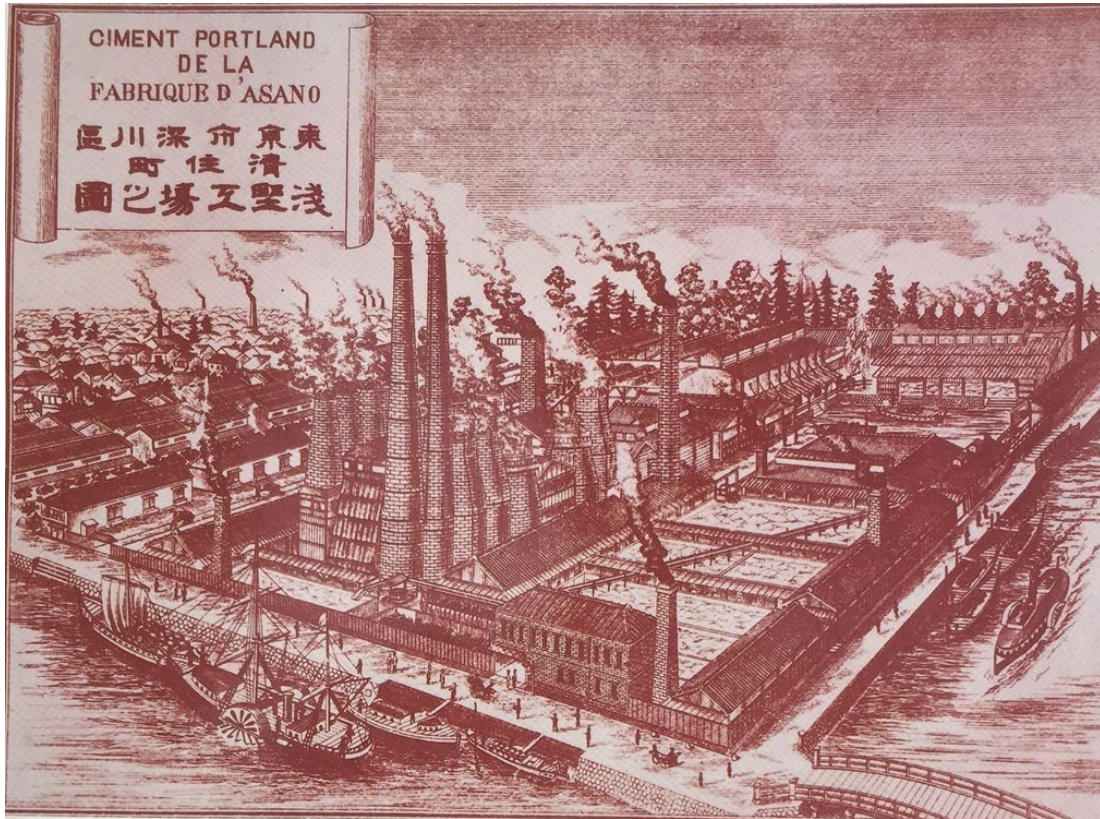
注4：コレラはインドの風土病でしたが、交易が広がるに伴い世界に伝播。日本は、幕末、開国を迫りにきた艦船から持ち込まれ、たびたび流行します。コッホによりコレラ菌が発見されたのは、1883年（明治17）のことです。

写真は、①深川セメント工場等の位置（明治42年測図（今昔マップHP掲載図に細見加工加筆）、②「セメント工業発祥の地」碑（明治23年当時の全景図、江東区清澄1丁目に建立、細見撮影）、③浅野総一郎像（発祥の地碑の近くに建立、細見撮影）、④「国立衛生試験所発祥の地」碑（千代田区神田和泉町1、東京衛生研究所の跡に建立、細見撮影）

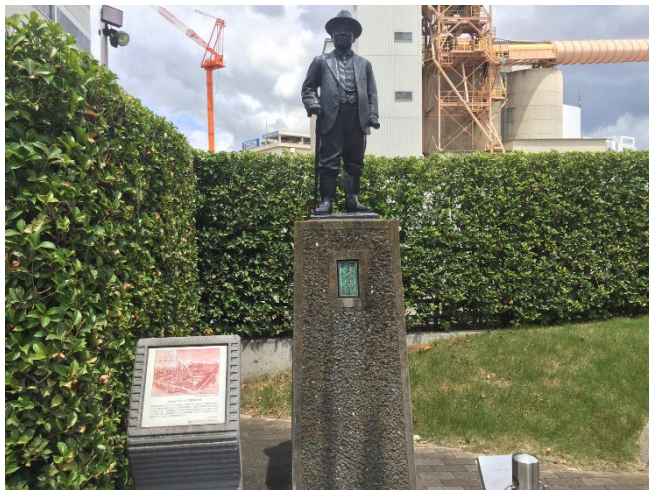
①



②



③



④

